

# 私の頭の中のまだエンピツ⑤

そだちと臨床研究会 川畑 隆

## 役に立つということ

よかった対応

前号で「自分（たち）の考えで進めていることは、実はその考えに操られている結果ではないのか」と不安になったと述べました。私たちが取り組んでいる『対応のバリエーション勉強会（以下、対バリ）』の趣旨に含まれる「対応に正解はない」という考えがその不安の対象でした。そして、操られているかいないかではなく、また対応に正解があるかないかでもなく、イメージしていることをそれ以上でも以下でもなく言葉にしたつもりです。この「それ以上でも以下でもなく」というところに戻れることが、それが自分として責任のもてる言動であるかどうか（全面的に操られているかどうか）の私の照合枠になっているように思います。

さて、対バリで扱う「対応」についてもう一点取り上げたいことがあります。それは行われた対応の「よかった（役に立った）ところ」をどの段階で評価するかということです。

前号では、対バリの実際の内容を紹介するロールプレイ場面での面接者役の対応（質問）が「よかった」と明確に見えたわけではなく、「そこで

そんなことを尋ねるか？」と意外に思われる可能性のある「不思議」で「不可解」な質問だったことを紹介しました。

対バリのロールプレイには大体十分間前後とそんなに長い時間はかけませんから、面接者からの対応を受けて面接が進行しているその初期の段階でストップになります。そして、感想を求められたプレイヤーは面接者からの対応についての感想を語ります。そしてプレイを観ていた参加者からは対応の「こんなところがよかった」と評され、面接者役は自分の対応の意図やその後の展開についての見通しも含めて発言します。対バリでは、そういう流れでさまざまな対応を試しその対応の役立ち度を浮かび上げさせようとしています。そして、そこから参加者それぞれに自分の面接力・対応力の向上に資するものを持ち帰ってもらおうとしているのです。

しかし、その役立ち度をはかる対象となる面接の実施・観察時間はごく短いものです。件の対バリの紹介場面での対応も、進行している面接の短時間内の文脈において「不思議」「不可解」と評されたわけです。でもその面接をその後も丁寧に続けることによって役立ち度を上げる道筋はあったかもしれませんが、入口が「不可解」なその対応だったからこそ作ることのできた展開だったと、後から評される場合もあることでしょう。

こう考えると、面接のある部分だけを取り上げてその善し悪しを言うことにはなりません。対バリの実施の仕方についても、面接によつてはより長い時間をかけたセッションを取り入れることも必要かもしれません。ただ、現行のままでもその価値はあるように思っています。「うまくいかない面接の中で起きている可能性のある自分と相手とのやりとりの悪循環を回避して、少しでも良循環でうまくいく（役に立つ）ような面接の起点や転換点となる対応を見つけること」への貢献です。

## ポジティブなとらえ

対バリで観たロールプレイへの参加者からのコメントは「対応のよかったところ」に限っていることとその訳については、すでに述べました。

このよかったところに焦点を当てる「ポジティブ」志向は、「ポジティブ心理学」（認知行動療法も含まれているのかどうかは知りませんが）という言葉もあるように、流行っているように思います。でも、物事にはポジティブとは反対のネガティブな側面もありますから、そこに目をつぶってあえてポジティブを押し出す（ポジティブに言うためにポジティブに言う）ことには、少し歯の浮く「おべんちゃら」みたいな感じももたれるのではないのでしょうか。また、ポジティブに評価するのは相手に優しいように見えるけれどもそれはちよつと無責任で、厳しくネガティブに指摘して相手にちゃんとその内容を引き受けさせること、そちらのほうが実は相手に優しいのではないかという意見もあることでしよう。

さて、私たちは「よいところ」「わるいところ」と簡単に考えてそう口に出しているだけで、何がよいかわるいかという「倫理的？」な内容やその評価する客観的基準に興味があるわけではありません。「ほめられるかどうか」の日常生活的感觉で、ただ両者を分けているだけです。

私たちは大体においてほめられたら嬉しいし、叱られたらそうじゃありません。でも、「ほめる」「叱る」対象となる相手の言動は、常識的に誰もが共通に選択するようなものだけではありません。各人が恣意的にとりあげ、その根拠には誤解や曲解も含まれていたり、あまり誰も目を向けないところに着目したものもあります。総じていえば「そうかもしれないがそうじゃないかもしれない、そうじゃないかもしれない、そうじゃないかもしれないがそうかもしれない」

見解がそこには含まれていることでしょう。

そのような中で、私たちにとって「ほめられる」のと「叱られる」のどちらが将来に向けた少しでも明るい展望を開いてくれるでしょうか。

叱られると心が縮みます。叱られたところを改善しようとして頑張っても叱られるところのない完璧な自分にはなかなかありませんから、向上心はあっても心は縮みっぱなしです。心は縮むよりも嬉しくて伸びるほうがエネルギーをくれるでしょうから、「ほめられる」ほうに大きく分があるように思います。そしてここにも差が出てきます。評価される根拠が誤解や曲解にもとづいているときなどです。「ほめられる」場合は誤解や曲解はよい（心がさらに伸びる）方向に、「叱られる」場合はわるい（心がさらに縮む）方向に作用するように思われます。何故なら、ほめられる場合は新しい可能性の芽を見つけてくれるかもしれないし、叱られる場合はあらゆる芽も摘んでしまいかねないからです。

問題を抱えて悩んでいる人だけではありませんが、よくないことが起きていると思うと何ごとにもネガティブな意味づけをすることになりがちです。私たちは、人が生活や業務の中で少しでもよい道筋や物語を作っていくことを支援する手段として、「ポジティブ」のよいところを採用し、「ネガティブ」のわるいところを回避しようとしています。「ポジティブ」という楽観主義を唱えているつもりはありません。

## 私のポジティブ

「私は、朝に何か失敗したりうまくいかないことがあると、『よし、今日はいろんなことがうまくいく』と思います。一日のうちに起きるわ

るいことの総量は決まっています、朝にわるいことがあると後はよいことばかりだというわけです。これは樂觀的です。反対に『朝からこうなんだから、今日は最悪な日だ』と沈んでしまうのは悲観的な考え方です。そして、樂觀的に思うと『ホラ、午後からはうまくいったでしょ』とよかったことに注目してピックアップし、反対に悲観的だと『ホラ、やっぱり今日はダメなんだ』と、よかったかもしれないことには目もくれず、わるかったことが拾い上げられます。朝の失敗そのものの事実は同じですが、それについての意味づけが違くと次の展開がこのように異なります。私たちがものごとを認識するのは、自分の身の周りの事実についての意味づけによつてです。先ほどの『朝の失敗』がたとえば『朝バタバタして親から小言をもらった』ことだった場合、『朝バタバタして親から小言をもらった』事実はなく、『朝バタバタしたことに対して親から何か言われたことを「小言をもらった」と意味づけた』ということです。これをもって『世の中には事実があるのではなく、意味づけがあるだけだ』と言っている人もいるぐらいです。」（拙著『要保護児童対策地域協議会における子ども家庭の理解と支援』明石書店、一部改変）

「ポジティブ」に操られているのではなく操っているつもりで、それは相手の役に立つためです…と書きました。もしかしたら「操られているのではないことを証明する必要がある」という考えに操られているかもしれませんが、本稿①に書いた「オリジナリティとは何か」にも通じますが、「私がそう考えている」と言えることを一点でも見つけることが大切なのかなというのが、脱稿時のいま思っていることです。

（了）